２０１８．９．２３

大草

読書メモ

94．保坂正康「昭和陸軍の研究　下」朝日新聞出版（2018.6）

95．梅原猛「人類哲学へ」NTT出版（2013.10）

**＜「昭和陸軍の研究　下」から＞**

・日本陸軍の情報部は、情報の重要性を認識していたが、情報収集・解析システムに全く何の考えも持っておらず、不完全極まりない低レベルの状態であった。

・アメリカの日系人の収容は、日系人から日本軍が情報を得ることを遮断するためであった（大本営情報参謀課：堀栄三）

・陸軍は海軍の暗号がアメリカ軍に解読されているとの疑念を持ったが、そのことを海軍に伝えることはなかった。その逆もしかり。

・海軍・陸軍共に山本五十六の死の真実を隠すため、関係者（6機の護衛機のパイロット、死体回収者、検視者）を最前線に送り殺そうとした。暗号解読されているとの教訓を得るべきであったが、そうしなかった。

・情報の重要性に注意せず、ひたすら突進していくだけの軍事組織となっていた。

・軍官僚は、現実を直視せず、責任逃れの体質であった。

・日本軍の参謀は、一般的に精神論（精神主義、観念論、主観主義）に傾きがちで、客観的に情勢を把握し、それをもとに判断していくといった理知的姿勢を持たなかった。

・参謀本部の組織体質

　①秘密主義

　②思想の教条化主義

　③権威主義（多分、属人主義もあったと思われる）

　④特権意識を持つ集団（天皇の代理人）

　⇒進歩を促す条件が生まれない組織体質であった。

・参謀本部が硬直化した原因は、同種の人間が主導権を握っていたこと、軍官僚が現場を知らなかったことにある。

・「統帥綱領」「統帥参考」：参謀本部の参謀しか閲覧できなかった。その内容に問題あり。

　EX..①勝敗は精神的要素に存する

　　　②少数兵による敵多数兵力の圧倒を励賛

　　　③兵站は第2編の末尾におざなりに記載

・こうして、参謀は、著しく情報や知識を軽視して精神論に走ったのである。

・情報を無視し、単なる思い込みやあてずっぽうで作戦が練られたことで、いくつもの悲惨な結果を生んだ（ガダルカナル作戦、インパール作戦などなど）。

**＜梅原猛「人類哲学へ」から＞**

・梅原猛は、86歳にしてようやく「自分の哲学」を語り始めることができたという。

・西洋哲学は、イオニア哲学に始まり、ギリシャ哲学・ローマ哲学をへて近代哲学や現代哲学になってきた。特にデカルト哲学により、理性主義と科学主義が重んじられるようになり、近代・現代科学が進歩してきた。しかし、人間が自然を支配できるとする哲学には限界がある。（2011.3.11の東日本大震災を見ても分かるように、人間の作った放射能が人類を傷つけている）

・東洋哲学はアニミズムから発生した自然調和の思想であり、多神教の考えがベースにある。

・この西洋と東洋の哲学をすべて包含する「人類哲学」を梅原は語り始めたのである。　　（大草：早く語り終えてもらわないと、時間がない）

・福井謙一：自然征服の科学から自然共存の科学へ変わることが重要。

・自然は恐ろしいものであるが、同時に慈悲深いものである。正しい自然観を持つ必要がある。

・永劫回帰の思想：あの世に行ってまた戻ってくる。同じことの繰り返し。

・生まれ変わる思想：利他思想の仏教だから、苦しむ人がいる限り、生まれ変わって救うことをする。

・2011.3.11は、「大災害」であるとともに「大惨事」（原発という人災）である。

・人間中心主義では、うまくいかない。共存の思想が必要。

・草木国土悉皆成仏（動物だけでなく植物や山河など存在するものは皆、仏性を持つ）

以上